

Centimetres 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

**KODAK Color Control Patches** © The Tiffen Company, 2000

**Kodak**  
LICENSED PRODUCT

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
------	------	-------	--------	-----	---------	-------	---------	-------



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN

TAMIA

2913  
28

特

昭和九年  
七月六日  
購末

貞操婦女八賢誌第九輯卷之二

村田

東都

為永春水編次



第五十五回

所沢驛路の勇婦等奸悪を鋤く  
岩鞍白屋の一賢女塵世を遁る

用説き拵阿安のか道等が長禪とうち所毎小致驚嘆して  
須臾辞も出ざりしが安の屢哀びてやがさく後晨危うま  
お二君さんのおん身の浮沈淋うく述ともひしうとまの控へも  
憚りたるお袖さんの杖のいん最致ぬおかけりのことさ  
お二君さんの桐巻さく澄く玄つる面共と遊くも捕へられ

今更測り知れねども先きさうあつては私共の一人はか  
 きんと八代さん先よりみながひとをせぬねむらばをさうさ  
 女房と知りてゐるふりあるまは交り結ても悪むべぬはは  
 老翁命あゝぬいあゝぬいしも各危窮ごまぬうれて交お  
 と合せらるその申おか梅がりふやう今私等ふ周縁ある  
 女會合せしやう不ぬ後とりふ由はあつたあつ那お袖さんの  
 被ふ仍らるその名もあつたお袖と申さんりる愛女のあはれ  
 女はん中へん中へ

今更測り知れねども先きさうあつては私共の一人はか  
 きんと八代さん先よりみながひとをせぬねむらばをさうさ  
 女房と知りてゐるふりあるまは交り結ても悪むべぬはは  
 老翁命あゝぬいあゝぬいしも各危窮ごまぬうれて交お  
 と合せらるその申おか梅がりふやう今私等ふ周縁ある  
 女會合せしやう不ぬ後とりふ由はあつたあつ那お袖さんの  
 被ふ仍らるその名もあつたお袖と申さんりる愛女のあはれ  
 女はん中へん中へ

你の素性あるのあは是れを御し  
白状せよ言のむねの初よりと  
脊骨先きさへひらき急所と  
血をさすまを責さいまわて  
それとも若痛小座をありあけん  
及びお袖と害せし首尾且  
示し余せ戸塚大六と欺き殺し  
懸係ふりしと死山猫小打  
まがとめお最湯きふるの  
女は人申す

けしとぞおしううの御も  
心のわらるるりと縁つま  
らあ所て先懐中お収め  
お涙し僕に僕女お対ひて  
とぞあるとれは天命  
るまが私がお掛け  
お梅が須臾とおとめ  
おへお最希よりの  
知らざるあやト女  
お梅が須臾とおとめ  
おへお最希よりの  
知らざるあやト女

せしおと人あ知るまゝに俺們が身お疑ひを受るなり  
うは家の名の懸名お及ぶべし人あれお入連りてお捕お  
做さそそ置りめと言ふお例々お亀がさうより  
えんのお辞の寔おゆつて四乃控お極今は若お白状のうら  
那鳥羽おとまうせしお美若の巻巻が女児おて私のお  
儂の隻刺岩鞍おて臘取お捕へらまうとあるうらの那里  
おらうて尋ねるがテおらも渠若の在おとまとい出し  
恨とて漫をるりもあらんう皆さん何とぞおせんせうと同  
まて兵改に笑女の中おもお道らうちおて金お俺們に人の若

お亀えんと信俱お先岩鞍へとむぎお都くお遠おとび  
おのひの信お破さいるは日おの怨と報せんと言ふお終お  
一変して旅店の宿お尋ねる友お友で測らむて舍りお人  
今宵俄お出立するとして旅籠の初定おとらう女お序  
とびお愛おまざるやうに拭おてはと結お目涙おまを冠ら  
しめ五女の沖おお度てかの旅店と結お出立お波の置おれ  
ある廣おおおおしと死お及の遺恨お堪ざるあや旅の  
笑女おが辞おゆつて引おまをりしう女お序とまお捕お  
お入連りして准儀の懐お抜おる右おお入つて懸へて

免らざるもの  
係せし概是生を不倣つる罪のあり来し冥界悦ひ  
アウと四より責つて字女を席が或はと斬是とさう飽  
まを苦痛とさせさう人続小首とうちあへり傷小を  
命小板の柄小伴の首と結び付後その板の身小と削  
りて夫立の帯と挿出し是ハ奸賊字女を席が首あり  
去る某月某の日小姓と害せし悉の女今月今宵報ず  
あのみり道女と書つて手恨俱ふ又と軽小拭ひ収めて是  
あて狗の鳴らると揚り完承とうちあへり最承より  
しと兄おろしうるか梅香の世嘆女いおたか倣方のりさだ

またと舞しく盛トあけりつて皆うち連て救又根の岩  
懸さしてを地りける茲小岩結の里もづまも昔のまを  
非程最も他しき白登小阿由と嘆る一歳女あり渠ハ  
甲斐の國分ある着心あり門といふる士之独女鬼をあり  
けるが岩懸清書が子息さる泡々助と幼稚より徳角  
張せし申ある中人今総外月の中院に甲斐より遠く雲  
入しと既小燈燭の燈ともあふさんとせし折しも縁合の  
宿飲祭より大急のおん居あるとせし誠せしと典わが  
報らふよりて折縁もあふる蓋さ人もあしあ人をかめ典わと



あゆ



八代  
あゆ  
信  
試  
を  
この  
田の  
本文  
と合  
るべ  
し

引連て係小敷足あつるあせか由の遠家小ありてより  
ひまご糸種あつざる小良まのあぢと引けられ別隊の  
居さし種元寄小慰められつ今日と色きおき目と見せて  
居るうち小かの泡々助が伴小連する一個の下ぬが由  
さうくさぬつて教知るやう供大ああるりそを起るぬ  
火急のあ良こあるふより教乃も厥の強念くひささるぬ  
とあく種小居津と矢込の間ある二又河原小かりしと死  
前己の御足と痛めて二里許の邊までと程進分んと心を  
厚まし足と引つて走らうと足にバを懸や若且於あひ

背と柄とと矢小くて来小降つて作し了傍小典物柄小も  
度小紙と肩あつてむねしくと驚ごと做し心通と睨んで  
まま一形勢怖るあつてさうあて仔細争物と同られば  
典物さなふと其息と吐き俺泡刀你と供俱小ひさすら  
及と會りて振目由ぬとと表々折し由程方小あらし  
及その入法小かうまう野の光根かの白女と板乃へさる  
不意小起るや泡々助と俺等小あつて菓等し小あひ  
がけあれるりあれば泡々助あは支と下肩先深く斬  
下られしと連の又公の小子息由人深慮あつる不降る食



秘測とぞしと我のまうと初老刀小眼もくくけん終小  
救首下の勝と肩あて首とく人も討屋さうと俺眼も  
見まがも多くの老小捕圍まれ救りんとくく小勝もあ  
かまう獲まがら俺とくも二箇下二箇下くづらうと高  
まともせを防ぐ秘小俺が刀先とあいらひ兼てやあ曲  
老多の又もとの安も蔭ふおざり入う速くも何おへう  
まけん安小教どゆえんさうあを款一人も捕へるざり選眼  
やうとあねとも強念よりの大急心のか只纏かまうてい  
表鞍の表名小構とまもあもえんう俺泡刀林の表氏小是う

那此小計きて河周の旨とも承とあつり郷うあう人  
之飯まがゆいあよりあて速く是等のうとか申さふ  
鞍知て款きと懸ぬよとさのまうさう小を場より自道  
度つてあしと大息して誇るあをさうと誇り小か由か  
作天果もて測もあうざりしう左小右小由典あが款り  
来り其う人を物も振まてやれ一做べきやうもあうんを  
心解りの仙中ると竊あうてゆるむとあまより五月途  
かの典あはる飯りか由小對ひてりくさう供測さる遠回  
の大急下奴が知しせあせぬらん自こい速さあ強念あ

そん共サ ほうのであいのす さまびやう  
管領家小孫出泡々助あり急病ゆへその後見え完結  
てんりのちやうま さまん せんしん せんれ せんのす  
典物名代うへ推系せし修中入まが嘆入のひ泡々助  
病れとあふが你みまじつべ死あり せんしん せんれ せん  
年を島家内札前して稍強勅小及びしる松倉よりして  
討隊とさう向その内札と大徳め那一族の中を撰びてそ  
島の城を小孫屋ととる迎以そのう小孫をわけがお孫と  
喚う似非厄が魁美光雅とるまて秩父山小橋の童り孫  
とるさんととるよりあり 泡々助の秩父根小年区住める  
乃士とわけが那地の素門よりあり せんしん せんれ せん  
穿

しつりあぐ 渠管が櫛籠を屋えありと見定ぬるるバ違ふ  
浪途せよ不老不討隊とさう下へ根と改て系と撰ぶ  
あつと死あいのち方由上への右長は久ありと扮拵らまうへ  
武門の眞加子建おまの傲しこれど百変不絶てもは情ま  
那泡々助が身のまりのゆ死おんがもは家へ縁ありて書入  
までもせらまうと今更甲変へも性ぐさうまへし せんしん せんれ せん  
さび某悪くいのちうままドと言ふ心小一物のありとも刻  
らざるやか由の涙とらち抄ひあの泡々助とら せんしん せんれ せん  
張せし中うるふまご婚姻の傲さびとも死るむの遠きと出は

と名ひ定めて来りしものと争う甲斐へ戻らんき只遠く人の  
おひあひ身と墨漆と形容と揃へん仕立て亡人の遠席  
はんと思へるとよれ不斜しくつとこと言ふ不興おらあ  
そのお穢由を理まうねと去者の目く不疎しと世の鏡も  
言ふあると尻とありらるそのうへを後おに憐く必つと  
みとあつた亡人の却てるおも悪うん敵と名接とあり人と  
言ふるをうりては後由屢をめと更不辨さきて只念以不  
款泊て憂うと慰めるとすう不とお好さぬ日板の何つ  
しうこそ五月月中院おまりし比興物の料らざる由かの鳥羽  
家と捕獲て渠と例女とみせしよりお由と款止め  
俺がを不入見んと名ひ定めし心も何のめり矢せ墨尻  
不あるうう傍を不る是序不遠家も知よぐ不款治る  
不替りしうとお由の系是賢女中人身の壽命と名ひあきぬ  
更不款きののちと由見せんをせしおおと辨さきとつとせ  
交り款が面持めて母存不あるんハコつらハ一とは里外  
不唐とむさび衣と墨不漆をうつく仏のたあ入られとも  
おふ仔細のある中人お世不る良友の百々日の果るまをハ  
と言ひあつてお悪賢ハ判らざりたり

第五十六回  
首級と送て八代河由と将大を  
轎小相俱て鳥羽玉巧小説く

これ  
金バか由の郡白屋小奴牌と由をいよを共衣有髪みながら  
の今及をひひさるしく居る種小典物の方よりハ味家不心  
より送るを近きささりの里人が衆と意一或と死ハ旗  
まゝ菜相えんとを付てあまある人の情不やりと目  
と僅小送るのこ然ともか由の愛しとも思つて一心仏の及小  
分入り唱名の声更不終ぞ左右する万小又凡もさきで馬  
目も異き水空月の来も終ふるりし以或日門也不終とて

禮と花魁ハ十六夜知らち唱らしく伝名と歳夜とま唱  
へつ教諭とをこる形勢とか由の牆の破るとよりさう歌さ  
びてうち領き那ハ女の六歌どの舞々の門とまのせん  
遠方へ遠方へと入らると六歌ハ歌ハ扱入るとお中見  
つ笑し氣おまご煽着きおん牙あて廻玉川終沙ささるハ  
余義お死るとあしらと身おつまされて痛ハいハ利央  
の像照り日中ハ別て畏映きとけ極先ハれゆくハとハ  
雲時小陰の物集るまて先憩ひて性の人とりハ不け方由  
らち弟ハ情深いとハお辯ささハ作ハ使ハくハ一の石お極

の湯と打浴敷ををどろりませうと言ひつづれば  
お由の在あふ古茶碗不暖湯汲よりさし出せと六郎の  
多くおし腹をに迎ふゆへに見せしむ世に縁ひる死おは  
おりえらけりともろろ庵主不世方おきぬお年記の  
お由おとさうさうしあのお室めて仔細ありとらうまと言れて  
お由の歎息ありおん方と吾後の世より縁ひり縁ひの  
あまひあや初対面と云ふおのまゝつしましうまどおん若とも  
おん方のうくとお頼知の人吾後うう人とも言ひおてせぬ  
妻さと晴さんと云ふおの影の長改て私うの八代とて縁  
し死處女でゆきとも世よりしてお由の縁ありある若  
八女ありまをを家と見ぬんお由とてお由の影の若  
若く又若女の尻むいと問ひてつまんやうもあし吾後が  
名の由とゆきよ遠地の今士衆鞍の書と定まる若  
しお由らぞ良妻泡を初が横死ふよりて縁ゆきその  
亡女と吊ふお由女と横し破き衣世不持らむつ世と持  
身のある果と六郎との不使とおめくおのれと言ひつづれば  
とあがくくくと懇くはて八代の大にゆてうち笑ひ供も  
笑止やおの毒や縁くおん方の遠々で若女とておん若女

の湯と打浴敷ををどろりませうと言ひつづれば  
お由の在あふ古茶碗不暖湯汲よりさし出せと六郎の  
多くおし腹をに迎ふゆへに見せしむ世に縁ひる死おは  
おりえらけりともろろ庵主不世方おきぬお年記の  
お由おとさうさうしあのお室めて仔細ありとらうまと言れて  
お由の歎息ありおん方と吾後の世より縁ひり縁ひの  
あまひあや初対面と云ふおのまゝつしましうまどおん若とも  
おん方のうくとお頼知の人吾後うう人とも言ひおてせぬ  
妻さと晴さんと云ふおの影の長改て私うの八代とて縁

とやらん此の時の多しきは為ねまうつ味入とらまうし不  
まくとつるるとの縁あり現在能書とつひ丹里小房人重  
まぐろ阿家とと対んと由せも仏とと跡ま社余が情いの  
見えげ果さるはあまひ船うりゆふ不不放心とと名床  
まるの由身の縁也。ドレ餘くと成りませうとらまうし  
茶一瓵でも由共苦みてふれが海まぬ物ぐるお茶不益  
去来がと笑と笑死て。そあわしく是の日外途中あて  
ふとふ不入りしおあろぐお茶の有りる様病が不名義子  
流るはぬ茶是と疎して是く後不たて寛やとらまうし

せと下の壺と矢りご一椀の辺り小き一壺て回茶由交  
うまハ代ハその候つと出で後く後お由ハ忙然と修りの  
ひり不果まえて止めもあ人を居りしが余あて由那女六  
羽が心ゆぐと丸辯の獨り殊不是る壺の伴合あゆま  
とき一寄つて伴の壺と披きえる不後流ふせし一級の  
首あり候しなから由不兵見れが為不教るく世と云しと  
人傳ふのく及び一那泡る助が首級するあを是れハと  
むくり後まきつ又然しこの妻時首級を控抱きて死へ老  
流ふとまけるが俺と心と兵車一獨りつとぐ名接と彼を不



為と  
去病  
名走  
風也  
過  
免



最茶葉が辞のうら小現を能言とつひ并如ふ辰おきまがら  
とのふらうのさう今以首と孫病の作る茶と猪りし根子ゆき  
あても那若が款の森名を所と由知りたる若う。とも知れ  
承かしく問も乳さんおそをふのつらざりしへ俺身なぐらも  
純ましやゆまごまきくもらるまト能退ひ止めくそとそれと  
衣の紙と大あげつ走らゆんとするおしも門にふあらず候  
お轎あまふ附副小鳥羽玉がその扮おも花員やふ  
袴と履と履りし時衣装許曼の伴高引連なる時おも  
例の大木が株ハ凡長場の湯汲まりしと鳥羽玉が枕敷あて

義堂いまでもありあがりしと遠月も供小加へ一が鳥羽おの  
お由が庵の門にふあつてええりて其お轎の表の男を  
如ふ措ぐおくて床よと紙の伴高引残しお見大六袴は後へ  
案門ももつて給くとお戸の裡へ入あされは出食がらふ  
おのよお由の紙とえあのせておの急さとおくとお指も  
おうれまらちお知て遠の然らしや鳥羽玉さな先と見へと衆  
度まふ鳥羽玉も最笑ししお小舎新とつひ一間小きり法  
是まていまるよのう人と言ひおさぬ目もあしねとも口お家  
されこのの時より母屋の巻紙も労らつてと遠如ふ問



辰のちも任せつゝ口を河法あり色まされと可憐驚くの  
小身とが尾とや一つ柄果まの何ともありて痛んまこと  
典物どのもも考てうらか鳴りてく居りてとちろ名ひげけ  
まゝ強倉より大石兵衛允儀方ぬのその後室とす人なる  
青春院と鳴まのふが室正さの徒と受ぬ分と違入ら  
ねんさあ違々這城人口下向あり仍てけより典物どのが自ん  
小是へあらるべけまどまをの物ふ角がまらま女の方でもは  
まよりよぢりかみと女子同士とやら私にまのつてさううとおか  
まを急務女方の女子同士とやら私にまのつてさううとおか  
殺せと叫ばられまありまこと完ふやふ傷るふか由は又

あふ念ふにゆうねびさう考く世ふ持られし私と管領さま  
より取らうといふと言ふと鳥羽を引とて其心不安い程り  
まがら藤原の管領さな奈何しと知しはけん泡々助が  
つまより  
ま由と言へるふまをぶる人への所へありのまを  
らちら良吏ふかされて脱か今尾ともあるまをさうあるがあら  
かんと  
貴人とやしくと法師ふるまをい最惜し今より登形ふ良  
まを  
まを  
大石儀方ぬのまを領地ある人ふ使とありて言然る  
べ死と君の御鏡のまをけまが承来使せまありてとて

後室さまの思ひ申すおんひりありーと言ふも又なる最  
お前の泡さるふ様とまての祭心あると能令度所の程  
おもせよ今更例あるんといひあるんあるまじけきと  
そこ作ふいふ泣ふと化氏偽もはるるをまされあが救代借  
る岩跡の家名お拘るのこころをて大石さまおも後念の  
骨尾とてとるひりふべけきとせぬとも得心させよとある  
後室さまの腹よいかを後室のころとせ分て家のころ又  
人のお世と持する身とせぬ喚出て能令家の心終るま  
喚とてひりふりくふおん身の為おもあうるほし金ひりす  
女ひりたるま

やと後室もむるとか申す所つ形容とありとあおひりけ  
あるる家のか石跡あのか家の在たと緯と別てのか  
緯とせぬぬあぬねと由一目知るとあひりてめて後と  
おもふ深うるとと言ふと有持おまあをまをいふとて慈  
つごと私が是まてまてつと信偽はらまふもひりあつた緯  
まーなごり首封てきお世とある後室さま余もるは時ハ  
能令言解りとの能も然り申へまら私考がむの  
程と推量して性うとあまはまをい命と持ても香  
とあら准儀の骨桶あまふありを和まはま入ると云葉の下

恋と回をて大六が想ふ来りし首桶とお由の月影ふつ死  
 つりつて唇と云せぬを信のせのむか由の事あり替身身の命  
 もさらく惜まねとも良吏の敵と討まてと傳ふ事入て是  
 發とも判らそ時節と密観ふのころ最前測らむ女六殺ふ  
 言はまき一変さるありぬると今更物死まてべ死さる事余とそ例  
 女六筆らるるまに遠六何うと途まんとお按のちお鳥羽  
 玉が時刻がうつるか返解の何とく〜と問つられ詮術もなき  
 死さるるもおひげり死雲の間より體を観とけ扱き死  
 りと云さるは赤の八代六殺の姿ふ引替へ小を擣ぬ小身  
 うる  
 軽き拍も心と務く二女が中へまゝあさがりつ〜声擣む  
 毒婦鳥羽玉素何あれが是まて許多の人とそとね〜  
 その奸悪の做〜号を現をまゐる泡々社と殺害する  
 典相が悪り〜とまけておまをみ渡女と若〜めまの〜を  
 うや後悪忽地廻り替て汝がお糸の首桶へ汝が首とそ  
 入るぬ〜〜と動くま〜と喚りつ〜襟が〜つらんて引張る  
 とは呪と名人と處の曲若〜ま〜腕とありさる〜つのお見  
 別ぬ下婢女がいらさる処へさ〜お不為門と不おろせ〜おん  
 轆のの後室さる由をま〜と入〜さる変〜と後悔さる〜と

言ふと凡門ある轆より忽地声とありてハ伏い〜  
由料らふとまじまへ素つてか毎の危が世の碎と醒さ  
せんと言ひつゝ智の戸を披き徐く出る一個の女信縁の  
髪と切捨ると後ろぎぬお指しげり身ふいた衣と云  
せ〜かかの白屋お扱こ入り稍と危あを飛走りける必  
竟と及ふか毎の危が名表出るとのう入めて後争何ある  
物終りある并い次の巻お分解とてんて知らん

村田

貞操婦女八賢誌第九輯卷之二了

女八賢九人中一

